R1 SG 台湾 FW

11/10（日）

皆さん、ウォーリーが誰だかわかりましたか？盛岡から田中マラソンのハーフを走るために駆けつけた、本校が誇る Mr. SGH です。下の写真で答え合わせをしてみてください。

今朝は台中からマラソンの会場へ長距離移動のため、4:35 にホテルのロビーに集合。とても早い時間でしたが、生徒達はちゃんと起きて、集まってくれました。ちなみに生徒達が着ているグレーの T シャツは、村尾さんがデザインしてくれたお揃いのものです。

近年、地方創生を謳う台湾での最大の成功例の一つ、田中マラソンは、今や台湾全土だけでなく、世界中からランナーが集まる国際的なイベントになりました。

村尾さんはこのイベントの計画運営に欠かせない人で、現地スタッフからの信頼も厚いです。村尾さんのおかげで、コース沿道での応援や、「震災復興支援ありがとう」のメッセージを、たくさんの台湾の方々に伝えることができました。写真で生徒達が持っているプラカードも、田中マラソン事務局が我々のために作製してくれたものです。謝謝、台湾。

日本のマラソンと台湾のマラソンは、別の競技かと見紛うほど異なっています。沿道で「加油（中国語で頑張れの意）」と声をかければ、選手が「謝謝」と返す。応援のやり方には決まりはなく、大音量の歌や踊りも見られる。給水所では水のみならず、お菓子やグッズ、まさかあんなものまで配られる。沿道で手を伸ばすと、選手とハイタッチも交わせる。選手にとっても応援する側にとっても、ここではマラソンはお祭りなのかと思わず感じます。

楽しい応援と選手の熱気にあてられ、原科が思わず、眼前にあった太鼓のバチを採り、さんさのリズムを刻み始めました。すると吉田や佐々木が踊り始め、応援に一つの新しい流れが生まれました。たくさんの方の目に留まり、地元メディアにインタビューを英語で受けたり、有名な外国人選手（東京オリンピックに出場するらしいですよ）や彰化県の知事さんと写真を撮ることもできました。

選手達がゴールしてからは、村尾さんに準備してもらったファイルとステッカーを配布。「震災復興支援ありがとう」メッセージをクールに伝えるグッズは、さすが村尾さんのデザインで、思わず目を奪われます。しかし走り終えた

直後のヘトヘトの選手達は、なかなか手に取ってくれません。生徒各人工夫をこらしました。配り切るには多少の苦労はありましたが、その分だけ、今回の活動の意義深さと達成感を味わうことができたようです。何気なく受け取った選手の中には、メッセージを読んだ後で、配った生徒の元へ戻ってきて、激励をくれる方もたくさんいました。なんだか素敵な光景。謝謝台湾！

パイコー飯弁当を食べた後は、スリッパ（いわゆる日本のサンダル）工場へ。田中マラソンが催された彰化県はモノづくりが盛んな土地ですが、伝統的な地場産品は海外の安価な製品や時勢、そして継承者不足といった日本にも通じる問題に頭を悩まされています。

訪れたスリッパ工場は、そんな危機を好機に変えた一組の素敵な夫婦が経営しています。とてもポップで愛らしい店内に入ると、これまた可愛らしい、意趣に富んだカラフルなスリッパが並んでいます。

手の平サイズに縮小されたスリッパのキーホルダーをDIYで作るアクティビティを行いましたが、その工程は本物のサンダルづくりと同じ。とても楽しく、スリッパの良さとそれを取り巻く社会情勢を学ぶことができました。

しかしなによりも、夫婦が心から自分達の仕事と製品を愛し、その素晴らしさをアップデートしながら、より多くの人に知ってもらおうとしている姿が、とてもカッコ良かった。モノの価値とはなにか、リブランディングとはなにか、肌で感じられた尊い時間です。

次に訪問したのは、近くのレンガ工場。彰化県は良質の土が採取できることでも有名で、長年高品質のレンガを供給してきました。しかし1999年に起きた大地震をきっかけに、レンガ作りの建物が地震に対して脆弱なのではないかとの懸念が高まり、その生産量は落ち、当時はたくさんあった工場も、今では2つを残すだけとなりました。

建材としての需要が回復することをただ待つのではなく、自ら商品の付加価値を見つけようと、今回訪問した工場では、レンガで作ったブロックおもちゃやレンガを用いた小品を生み出しました。また、観光工場化を進め、レンガ工場の135メートルの長い窯やブロックおもちゃのDIY体験を提供しています。

生徒達も今回、DIYでロウソク立てを作りました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、ついに村尾さん達との最後の晩餐を残す

のみとなりました。台中の鳥料理の名店で、大きな円卓を囲み、まずは村尾さんから今回のプログラムのラップアップをしてもらいました。

この報告を読んでいただいている皆さん、今回の村尾さんプレゼンツの３日間に通底しているもの、それはなんだと思いますか？こちらの文才が乏しいため、うまく伝わっていないかもしれませんが…

「いつの日か、台湾でのあの瞬間が活きているな、そう思ってくれる日がきてくれたら嬉しい。」そう村尾さんは言いました。

答えはきっと「種蒔き」なのではないでしょうか。どんな言葉が心に引っかかるのか、どんな体験が貴重なものとして残るのか、いつそうした事物に出会い、どれくらい今後の人生に影響を与えるのか。それらは生徒一人ひとり異なります。だから、いつどんな形で発芽してもいい。発芽しなくたっていい。彼女達が持つ潜在能力を楽観的絶対的に信頼し、尊重し、そして慈しむ姿勢が、村尾さんをはじめとする今回関わってくれた大人達にはあったんじゃないかと思います。

そうした愛を知ってか知らずか、生徒達は既にこの短い間に、確かに変容しています。台湾のおもてなしに触れ、日本はこのままではいけないこと。自分も地球市民の一人であるという意識が芽生えたこと。村尾さんのプログラムで育んだ視点で、街の見え方が変わったこと。これらは全て、プログラムの最後に、村尾さんに生徒達が語った感想の言葉です。

夕食後、村尾さん達（村尾さんは今回のマラソン参加のため、複数の大人の皆さんと動き、三日間我々に帯同してくれました）の元へ、生徒達がそれぞれ挨拶やお話、進路相談に行きました。別れを惜しんで、この出会いを自分の肥やしにするために、懸命に話をしていました。

旅程の関係で、最後は教員の方で話を遮り、無理矢理にお別れさせてしまいました。申し訳ないです。でも、生徒達のそうした姿勢が、とても誇らしく嬉しく思えた夜でした。

謝謝台湾

勇往直前
有夢最美
日本宮手縣立
盛岡第一高等中學
為您加油
迎福田中

水站
謝謝台灣

謝謝台灣